

井尻 秀憲著

福澤が夢見たアジア

西郷の大変革

福澤諭吉がどうして一万
口札の肖像になるほどの人
気者なのか、私には少々理
解しかねるところがある。

西郷が高い評価の対象であ
り、後者では、旧社会の思
想に真逆の行動をとった人
物としての勝・榎本が論難
の対象となっている。

おそらくは、福澤が天賦人
権説や社会契約説を、福澤
独自の文体で実に巧みに説
いた啓蒙思想家として人気
を博した人物であったがゆ
えであろう。そうした思想
の原型は、すべて『学問の
すすめ』という明治五年か
ら同九年までに書かれた文
章の中に出揃っている。

『学問のすすめ』の福澤
と、『丑公論』『瘠我慢之
説』の福澤のどちらが真実
か、私は後者だと考えるの
だ。

偏った福澤像を生み出したもの

左翼リベラリストたちの願望

渡辺 利夫

しかし、福澤の言説がい
よいよ輝きを増していった
のは、その後である。福澤
思想の核心と言うべきもの
をあらわにした小論が、明
治一〇年、西南戦争の逆賊
・西郷隆盛を擁護した『丁
丑公論』、維新の傑物・勝
海舟と榎本武揚の二人を徹
底的に難じた『瘠我慢之
説』である。前者は、旧社
列強の進出がアジアを経て

だが、戦後の左翼リベラリ
ズムのよく似合う肖像は前
者でなければならぬのだ
ろう。本書の著者も、その
あたりのことをよく見据え
て以下のように記す。
「当時進行していた欧米

を福澤という一大権威に求
めたいという願望―それが
意識的であるか無意識的の
あるかは別として―があっ
て、その願望が随分と偏り
のある福澤像を生み出した
のに違いない。著者もまた
そのように見ているのだ

の評価は定まっていまい、
これはもうどうにもしよう
がない。NHKの昨年の大
河ドラマ『西郷どん』の
とくに、である。おそらく
そういう評価は、内村鑑三
の『代表的日本人』で次の
ように書かれた辺りから動
かし難いものとなっていた
と想像される。

「一八六八年の日本の維
新革命は、最後の革命であ
ったと称してよいと思われ
ます。……西郷なくして革
命が可能であったかとなる
と疑問であります。木戸や
三条を欠いたとしても、革
命は、それほど首尾では
ないにせよ、たぶん表現を
みただけではありません。必要
だったのは、すべてを開始
させる原動力であり、運動
を作り出し、「天」の全能
の法にもとづき運動の方向
を定める精神でありまし
た」

が、そうであれば福澤の文
献との格闘を通じて戦後思
想の危うさと妖しさを、一
層鮮明にしてほしいと切に
願う。

内村は廃藩置県という大
事を捉えてこれを革命と称
したのである、確かにそ
う言っている面影がある。

★いじり・ひでのり＝東
京外国語大学名誉教授・
国際政治学・東アジア国
際関係論。東京外国語大
学大学院修士課程修了。



新書判・192頁・800円
アジア・ユーラシア総合研究所
978-4-909663-08-5
TEL. 03-5413-8912

では維新の第一人者として

「もし明治維新が倒幕だ

一年生。